

エリア

AREA

2005. 4. 8

No. 37

平成 16 年度国土交通省地域振興アドバイザー派遣・終了報告

平成 16 年度国土交通省地域振興アドバイザー派遣は、昨年 5 月 25 日に東京でオリエンテーションとアドバイザーとの打合せでスタートしました。派遣地域は、20 市町村で、そのうち千葉県栄町・東京都日野市・瑞穂町、長野県阿南町は試験派遣、長野県松川村はフォローアップ派遣でした。また、過去派遣のあった、山形県小国町、岐阜県白鳥町、徳島県由岐町へフォローアップ調査を行ないました。『エリア』37 号では、派遣終了にあたって、本派遣（3 回派遣）のあった、15 地域の派遣報告を掲載いたします。（試験派遣、フォローアップ調査結果については『報告書』に所収しました）。執筆者は派遣受入れ地域の担当者の方々です。派遣を振り返りレポートしていただきました。派遣受入れにあたっては、様々なご苦労があったと思います。アドバイザー及び派遣受入れ地域関係者の皆様に深く感謝いたします。

宮城県／唐桑町

唐桑町は、宮城県の最北東部に位置し、岩手県と接する海と緑に恵まれた自然豊かで風光明媚な漁業と観光の町です。

観光拠点施設として宿泊施設「国民宿舎からくわ荘」とレストラン・レクリエーション施設「漁火パーク」があり、各施設とも 唐桑町観光振興協会に委託し管理運営を行なっています。しかし、その経営は厳しく毎年多額の赤字を出している状況にあり、町がその損失補填を行なっていますが、町の財政も大変厳しい状況にあり抜本的な改善が求められています。

今回地域振興アドバイザー派遣事業を実施することとし、各専門分野の立場からアドバイスを受け、本町の観光事業の推進と両施設の経営改善に取り組んできました。

第 1 回の派遣では、唐桑町における観光の現状や、からくわ荘と漁火パークの経営状況を把握し、その改善策についてアドバイスをいただきました。利用者へのサービスのあり方や町全体でストーリー性を持った観光振興を進めていくこと等、利用者のニーズを適格に把握し対応することの重要性をあらためて認識しました。



第 2 回・第 3 回の派遣は、近隣市町村の観光施設を視察し、各施設のつながりを持った「線」としての観光コースを描いて、観光客の誘致を図る必要性や「面」としての広域的な PR の必要性についてアドバイスを受け、地域産業と観光を結びつけた「食」による観光振興策や、教育と結びつけた「体験学習」の重要性を再認識したところです。

また、今回のアドバイザー派遣事業を通じて、町・漁協・観光事業者・町おこし団体等、本町の観光産業に携わる関係者全員が地域と共に考え、議論し行動することが地域づくりに欠かせないことを、全体で確認し合えたことが成果であったと思います。

町の生活や文化をもう一度見直し「地域の棚卸」を行い、その資源を活用し観光と連携させることにより増客が図れること。そのことが地域づくり、町づくりにつながっていくのではないのでしょうか。今後これを継続、発展させることが私たちの役割であると感じました。

町では、平成 17 年 4 月 1 日より「国民宿舎からくわ荘」と「漁火パーク」を指定管理者制度を導入し、行政、民間、地域住民が一体となった、新たな運営をすることになりました。本町の観光客の集客を図り、経営改善を進め地域の活性化に向けて、これまでのアドバイスや議論を実践してまいりたいと思います。

（産業振興課 鈴木 誠）

福島県／南郷村

私たちの村は、「観光と農業」を中心に地域振興策を講じてきているのですが、その観光面での要となる 3 施設（温泉宿泊施設、日帰り温泉施設、スキー場）の活性化を図るため、平成 12 年 10 月に村直営から第 3 セクターに移行し施設経営を行ってきています。3 年半をかけ経費の削減等により経営改善を図ってきたのですが、健全経営には程遠い現状となっており今後の施策について行き詰まっている状況でした。そのような中、今回の派遣制度を知り 3

名のアドバイザー（久木田禎一／(株)エヌ・ピー・エヌ、高橋功／(株)北海道二十一世紀総合研究所、長沼修二／総合ユニコム(株)）をお迎えし3回の会議を開催しました。

【会議内容】

1回目：第3セクター3施設の状況確認や経営状態等の検証及び今後の会議の方向性などが話し合われた。温泉宿泊施設については、施設が古い分細かい部分のメンテナンスについての配慮、客室スペースの有効活用、オフシーズン対策、地元産品の有効活用、施設としての雰囲気づくりなどについてのアドバイスを受けた。スキー場については、誘客ターゲットの見直し、利用者人口の動向等細かい分析の必要性、日帰り温泉施設については、ランニングコストを低減させるための方策や、余ったお湯の活用方法等についてアドバイスを受けた。基本的な情報交換を中心に話し合いがされ、会議の方向性として「今後5年程度で経営を改善していく計画書」を作成することを確認し会議を終了した。

2回目：前回の内容を受け、入湯税の取扱いや経費削減の手法など、様々なシミュレーションからのアドバイスをより具体的に受けた。各施設とも料金設定や利用客の数値から黒字経営のボーダーラインを出し実現可能かどうか検討したが、あくまでも目標値であり数字合わせでなければならぬにでもなる、もっと大胆な手法が必要であるなど厳しい指摘を受けた。温泉宿泊施設では、平日連泊割引の導入や基本的な価格設定のあり方、また営業活動の強化などの施策について、スキー場についてはファミリー層など新規客の取り込みの必要性、日帰り温泉施設については、サービスの向上に伴った料金設定のUPなど非常に参考となるアドバイスをいただいた。ポイントとなるのは、メインターゲットの絞り込み、しっかりしたコンセプトによるマーケティング、地域の持っているポテンシャルの活用が今後のキーとなるという内容だった。

3回目：具体的な経営改善内容について計画策定に向けた話し合いが行われた。

温泉宿泊施設については、健康運動師によるヘルシーメニューや体験ツアープログラムの開発などの検討について、日帰り温泉施設については、温泉方式の変更によるランニングコストの削減、スキー場については、地場産品を活用したレストランメニューの検討、3施設のうちス

キー場は第3セクターの核となる施設であり、会社全体の50%以上の売上が必要である、また施設毎でだけ検討するのではなく、部門によっては統一して行えるものがあるのではないか、中高年層の誘客など3施設全体で考えていくのが効率的である、など、今後の方向性がより具体的に生まれ、改善計画についてのまとめを行った。

以上3回の会議により、現実的かつ効果的な改善計画書を作成するきっかけができました。第3セクターの内部だけでは検討しても閉塞感があり先の見えない状態でしたが、今回の会議でアドバイザーの方々に様々な指摘事項や貴重なアドバイスいただき、ひとつの大きな壁を越えられたように思います。また、職員の意識の高揚にもつながりました。今後は第3セクター3施設の健全経営に向けた取り組みに合わせ、地域全体の観光振興に結び付けていきたいと思っています。

（企画観光課 近藤 功一）

茨城県／鹿嶋市

現在、鹿嶋市では、新鹿嶋市総合計画（2002年策定・計画期間2002年～2011年）に基づき、「交流」をキーワードに市民・事業者・行政の三者による協働のまちづくりを推進しています。

今回のアドバイザー派遣事業では、2003年2月に鹿嶋市における協働のまちづくりを推進する市民組織として発足した、「鹿嶋市まちづくり中央委員会」（委員数60名）の6つの専門部（総合計画の6つのまちづくり目標に対応）と行政職員を交えた「協働のまちづくり会議」へ3人のアドバイザー（熊倉浩靖／NPOぐんま、帯刀治／茨城大学、佐々木茂／高崎経済大学）にそれぞれ2つの専門部を担当していただき、助言をお願いしました。

各専門部は、①市民スポーツの活性化と健康づくり（スポーツ先進のまち専門部）、②韓国西帰浦市とのITを活用した中学生交流（世界に羽ばたく人づくり専門部）、③地元の伝承特性を活かした健康生活づくり・地域巡回パトロール隊創設・高齢者テレホンサポート体制の確立（健康・安心・福祉のまち専門部）、④まちをきれいにする条例・不法投棄監視員制度・ごみ減量化推進委員制度の活性化策及びエコセンターの設置（美しいまち専門部）、



⑤鹿島神宮を核とした賑わいづくり（交流と産業のまち専門部）、⑥自治会活動の活性化とまちづくり（市民が作るまち専門部）をテーマに、協働のまちづくりの推進に向けた行政への提言や実践プログラムについて討論を行いました。

アドバイザーからは、協働のまちづくりを進めるための総論として、市民と行政の双方が点検作業をしながらすり合わせをしていくことが重要、市民が行政の下請けとならずに、パートナー（＝対等）の立場を堅持すること、また、それぞれの活動に、分かりやすい数値目標を設定すること（この場合、数値は独自の基準ではなく、全国共通の一般的な数値を用いること）などのほか、各論では、事細かに貴重なアドバイスをいただきました。

今回のアドバイザー派遣事業では、市民から行政への様々な提言やプログラムがまとめられたことに加え、専門部が母体となり、NPO設立に向けた準備組織が立ち上がるなどの具体的な成果もあり、市民・行政共に、協働のまちづくりの進展に大きな手応えを感じています。

協働のまちづくりについては、鹿嶋市に限らず、全国の自治体で、市民も行政も試行錯誤を繰り返しながら、手探りで進んでいるのが現状だと思われます。本事業を通じ、「協働」の意味や活動の方向性を確認できたことは、当市におけるこれからのまちづくりにとって、貴重な第一歩となったと確信しています。

（まちづくり推進課 堀田 博史）

茨城県／谷和原村

平成17年度開業予定のつくばエクスプレスとその新駅と一体で整備されている開発区域より北部に位置する城山運動公園周辺は、当村では少なくなった「里山環境」を残している地域で、平成13年度に一般公募の方、公園周辺住民の方等を構成員とする実施委員会を発足し、城山運動公園周辺整備報告書を策定しました。本計画対象地は約20haの広大な面積を対象としており、報告書の中では各種施設の整備について住民参加の手法を取り入れながら、城山を「里山環境の保全や住民交流・参加の場」として事業を推進していくことがうたわれています。報告書が策定されたものの、計画全てを一度に整備することが困難な状況の中で、前年度の試験派遣を受け「でき



るところから始める」を基本とし、引き続き佐藤修氏（株）コンセプトワークショップ代表）をお迎えして、住民参加による整備手法や体制づくり、これからの進め方等、基本的な部分からアドバイスを頂きました。

【第1回派遣】

住民参加の手法を取り入れながら住民が主体となって活動していくために住民組織立ち上げへ向け、実施委員会の公募委員、地元区長、住民主体の活動経験が豊富なNPOの方に呼びかけ意見交換会を開催しました。

住民主体による活動経験が無いことから消極的な意見が多い中、アドバイザーから事例紹介等により「住民の皆様が自主的に動き失敗しながらも進めていくことが大切であり、住民の意欲が行政を動かす。住民と行政の関わりが重要であり、人と人のつながりが住民主役につながっていく。」とのアドバイスを頂きました。

【第2回派遣】

第1回目のメンバーで、城山運動公園周辺の現地を見ながら、具体的な住民組織の立ち上げへ向け検討会を開催し、出席者が中心となって住民組織「城山を考える会」を発足しました。計画対象地の一部を借地し「城山を考える会」で土地利用を図り、イベント等を開催しながら住民主体で城山への関わりを深め報告書に向けて進めていく方向性が見えたところです。

【第3回派遣】

実施委員会、研究会、城山を考える会合同による会を開催し、活動に向けて「城山を考える会」発足の報告と目的・方向性等についての確認をしました。

住民主体による取り組みとはいいつつも、全く基盤も出来ていない状況から、まずは住民組織「城山を考える会」が発足され、徐々に輪を広げながら進めていく方向付けが出来たことで、ようやくスタートラインについたと考えます。こうした活動を通して、住民が主役となり住民主導・行政支援の形により、更に住民と行政のつながりを深め、地域づくりにつながることを期待します。

（総務課 菊地 正宏）

富山県／氷見市

氷見市においては、農山漁村の持つ豊かな地域資源を“ひみの宝”と位置づけ、地域住民が主人公となりそれらを保全・整備・活用することで多くの人々に氷見の良さをアピールする「地域全体が博物館」とであるという思想に基づき田園漁村空間博物館づくりに取り組み、地域の活性化を目指しています。

人口の減少傾向や少子高齢化が進むなか、地域の歴史・伝統・文化など有形無形の地域資源を展示物と捉え「地域全体が博物館」とであるという思想に基づいた地域づくりを進めるうえで、地域資源をどう生かして都市との交流促進を図るかが課題となっています。

この課題解決を図るため井原満明（地域計画研究所）木下勇（千葉大学）鱸雅守（三州足助屋敷）の3名をお迎えして、地域づくり活動の中心となっている「地域協



議会」のみなさんとともにアドバイスを受けました。

第1回は博物館づくりの現場の点検を行った後、地域協議会のメンバーも参加し、先生方より田園漁村空間博物館の基本的考え方や地域活動の進め方をアドバイスいただきました。

なかでも、ワークショップの本質は参加者同士の発見と共有にあることや「男のロマン、女の不満」に象徴されるように活動への女性の参加の重要性などを再認識しました。

第2回は、広い市域全体を舞台とした地域づくりであるため、1回目で回れなかった現場を地域協議会メンバーも参加し点検したのち、2つのグループにわかれて点検した現場や地区の課題についてワークショップを実施し、助言をいただきました。

完成度の高さや手づくりの味わいを評価いただいた一方、運営方法の未熟さに対する指摘を受けるとともに、第3の活動者として民間企業の支援制度など新鮮な提案もありました。

第3回の前半は前回同様2つのグループに分かれ、宿題となっていた各自の課題について解決策を提案し、最後のアドバイスを受けました。

後半は、一般市民も参加した「ひみ田園漁村空間博物館推進大会」を行い、井原先生には事例紹介と締めくくりを、鱸先生には「都市との交流促進」、木下先生には「人づくり」をテーマとしたパネルディスカッションのコーディネーターを務めていただき、3回の派遣を終了しました。

アドバイザー派遣を終え、これから地域づくり活動をさらに推進するため、行政側と市民側との情報の共有化や行政と活動家のみなさんとで構成する事務局組織の構築を急がなければならないと考えております。

今後もなんらかの形でアドバイザーの先生方のご指導を仰ぎながら、ひみ田園漁村空間博物館づくりに時間と労力を惜しまず取り組んでいきたいと思っております。

(ふるさと整備課 表 良広)

石川県／珠州市

平成17年3月末をもって統合により廃校となる小中学校校舎有効利活用策の検討をテーマとして、能登半島最先端の珠州市の中でも最も先端地域にある学校周辺の日

置（ひき）地区の地元有志25名を中心に「有効利活用を考える会」を平成16年6月から発足し、その検討を開始致しました。この検討を進めるにあたって、平成16年度の国土交通省事業である「地域振興アドバイザー派遣事業」に採択頂き、井出、菅原、富田の3名のアドバイザーからの助言を頂いて参りました。なお、アドバイザーの派遣については、平成16年6月の第1回から平成17年1月16日の第6回のうち、3人のアドバイザーには第2回、第4回、第6回の会合に参加を頂きました。

当初の予想どおり第1回～第3回までの会合では、「市役所は何をしてくれるのか」「経済的な支援はあるのか」など、地域での自立可能な有効利活用計画の検討とはほど遠い議論に終始していました。

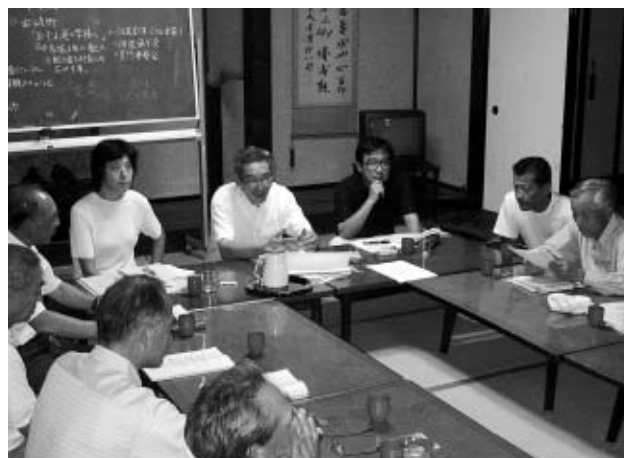
しかしながら、アドバイザーから参加者への「宿題」や「具体例」を交えての討論のあたりから、参加者の再活用イメージも膨らんできたのか、前向きな意見交換が行われはじめました。その後は、概ね「食」や「体験」を基本にした施設への利活用方針が第4回の会合において確認されてきました。

その後具体論について4時間にも及ぶ議論が膠着したかに見えたとき、菅原アドバイザーの「まず行動すること。廃校記念式典の日にテストメニューをやっては。」の一言で、参加者の戸惑いも晴れ、その場で具体的計画を編成する6名の「実行委員会」までが決定されました。

平成17年3月26日の廃校記念式典開催当日は、「考える会」のメンバーのほとんどが何らかの形で式典行事に関係していることから、テストメニューの実施にあたっては、人的な配置や参加者の確保等が大きな課題となっはいますが、何とか実践したいとの気持ちで実行委員会がその準備を連日連夜行っています。

「まちづくり」は「人づくり」である、これまで幾度となく耳にしてきた言葉でした。

行政が手伝ってくれないと、何もできない。自分たちだけでは出来るはずがない。という意識の参加者ではじめたこの「考える会」も、3回の派遣事業を通じてようやく「自ら考え、行動する会」への第1歩を踏み出したような気がします。確かに25人全員が、大きく変わった訳ではありませんが、今後地域における活動を支えていける「人づくり」に関しては大きな成果があったと感じていま



す。今回の事業で出来た小さいながらも地域のために「行動したい」仲間の輪をさらに大きく広げ、最終的には自立できる組織となるよう、引き続き行政として支援していきたいと思います。

(企画振興課 金田 直之)

福井県／丹南広域

近年観光客が減少し、特に宿泊客が減少傾向にある中、「地域資源を活かした観光振興方策について」～丹南の観光資源を連携した魅力ある観光ルートの設定～というテーマで、前田 博氏、阿蘇 裕矢氏、南 賢二氏の3名をアドバイザーとしてお迎えした。

第1回目の派遣では、丹南11市町村（現在6市町）の主要な観光施設や資源を駆け足ではあったが調査し、各施設の問題点・課題等についての意見をいただいた後、今後の進め方について意見交換した。

会議では、当圏域は打刃物、漆器、和紙、焼き物等の伝統工芸等、観光的な視点からみてもそれなりの魅力を持つものづくりが盛んな地域であり、それを活性化するために、ものづくりを基点に観光に活かす産業観光を目

越前たくみ街道（えちぜんたくみかいどう）

のんびりまちを散策しながら、3つの伝統的工芸品・職人の技に触れる
自分で打ったそばを越前独特のおろしをたっぷり入れたつゆで味わうコース。

☆1日目☆

JR鯖江駅	
約8km	約20分
▼	
越前漆器伝統産業会館 (20) 越前漆器の行程見学	
約1km	約5分
▼	
かわだ軒下工房 (60) うるしの里訪ね歩き	
約1km	約5分
▼	
ラポーゼかわだにて昼食 (50)	
約15km	約20分
▼	
越前和紙の里めぐり (60) 和紙の里通り見学・紙漉き体験	
約11km	約30分
▼	
刃物の里 越前打刃物会館 (60) 越前打刃物の行程見学	
約20km	約50分
▼	
花はす温泉そまやま宿泊 はす公園散策	

☆2日目☆

花はす温泉そまやま	
約8km	約30分
▼	
今庄造り酒屋見学 (40)	
約7km	約20分
▼	
今庄そば道場にて昼食 (120) そば打ち体験	
約18km	約40分
▼	
蔵の辻・タンス町工房まで歩き (100) 蔵のある古い町並み散策 職人の伝統技を訪ね歩く	
約1km	約10分
▼	
JR武生駅	

指したほうがよいという意見をいただいた。

そこで、ものづくりの「匠」をキーワードにしたルートを設定するために、次回派遣までに、食、歴史、花等テーマを設け、各市町村のいろんな「匠」を調査する作業に取りかかった。

第2回目の派遣では、各市町村の観光に関する現状報告や質疑の後、本題である「たくみ街道」のルート化について意見交換した。まず、各市町村のものづくりの「匠」についての報告や質疑のあと、ルート化の検討が行われた。

そこで、単に既存資源をつなぐのではなく、ルート化のコンセプトとして、①人の魅力が感じられ、匠の技を披露してもらい、それを説明してもらえること、②ターゲットとする客層を関西からの中高年とすること、③ルートを地図に落とし、所要時間や費用を詰めること、④食が大事であり必ず組み込むこと、⑤越前打刃物、越前漆器、越前おろしそばは必ず組み込むこと、などがあげられ、それをもとに、「越前たくみ街道」としてルートを設定する作業に取りかかった。

第3回目の派遣では、1泊2日で設定した「越前たくみ街道」のルートのひとつを6時間に短縮してモニターツアーを行った。その後モニターツアーについて意見交換した後、コース設定について議論した。

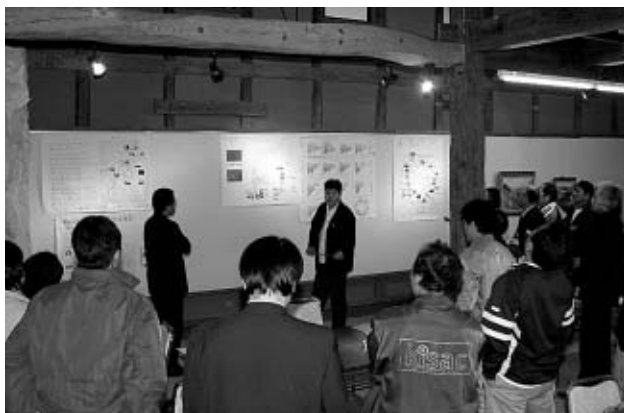
最後にアドバイザーから派遣に関する最終助言として、戦略をしっかり考えてこれから進めていくことや、京都・金沢との差別化を意識すること、今回のルート化では丹南の中心部が結果的に対象となってしまったが、まず丹南広域の中心部の産業観光を活性化させてから、それを膨らませて周辺の自治体の活性化に結びつけることが大事であるというアドバイスをいただいた。今回の派遣では、具体的なコース設定までには至らなかったが、今後もこの派遣をきっかけに、ルート設定に関してバリエーションを付けて数パターン用意するなど、継続して取り組んでいきたい。

(丹南広域組合総務課 一家 智美)

長野県／木島平村

木島平村では、今年度村景観推進協議会を中心として「色彩と景観形成」というテーマで、ワークショップやフィールドワークを行ってきました。建築物の屋根や外壁の色彩について検討を進めてきましたが、住民グループの取り扱う課題としては少し難しすぎる課題でもあり、行政的課題を住民の課題としていくことには少々苦労もありました。幸いにも本派遣制度により、内田文雄先生（環境計画）と吉田愼悟先生（色彩計画）をお迎えし、3回という少ない回数でしたが、的確なアドバイスを受けることができました。

住宅を中心として、現場調査やこれまでやってきたことのなかったシミュレーション写真なども作って検討をしてきました。様々な写真を作ってみるにより、新しい発見もありました。例えば、住宅の集合写真上で屋根の部分に統一した色を付けてみると、様々な色がある元



の風景写真の方が印象が良いということがわかりました。その理由とすれば、CGの方は普段見慣れないというのもあると思いますが、単一の色調よりも、ある程度の色の拡がりがある安定感を生むのではないかと思います。そのような調和感を保つことが大切で、ある一つが飛び出していたりするとそれが全体のバランスを崩すのではないかと思います。また、その区域の周囲との関係性も大事であるということもわかりました。

これまで色彩という観点から、基準で定めるべきマンセル記号の範囲を如何にするかのみに没頭していた感があります。もともと同一の色調で村内の景観に統一感をもたせようという目的ではありませんが、色彩のガイドラインを定めるため、色相や彩度の範囲をどのようにするかばかり考えていました。しかし、先生のアドバイスやワークショップを通じる中で、これら色彩記号は行政側のバックデータとすれば良いのであって、もっと住民にわかり易い方法を考えることが大切であるということがわかってきました。もっとメーカーで販売している物を参考にしたり、サンプルを活用したりしながら住民とともに地道な検討を行うことにより、村の景観色彩の方向性が自然と出てくると考えられます。

試行錯誤しているばかりで、色彩ガイドラインの策定まではいきませんでした。今年度は一つのステップを踏むことができたと思います。もう少し住民との話し合いや現場調査を実施することにより、初期の目的に近づけると考えます。引き続き取り組んでいきたいと考えています。先生からアドバイスいただいたように、テーマに限定されず、もっと広い視野をもち、村としての景観の目指す方向をきちんと研究することが大切だと思います。

(村づくり推進室 小林 正俊)

愛知県／田原市

谷ノ口地区は、渥美半島の太平洋岸域に面し、田原市の農業を支える自然豊かな地区であり、年間数十万人が来訪する地区であるにも係わらず、地区内の生活道が未整備であることなど、これまで地区自体が地域活性化の機会を逃していたのが実情です。近年では、農地基盤整備の機会を逃したことによって非効率な農地が点在し、効率的な農業経営に支障をきたしているほか、農業後継

者不足に対しても多大な不安を抱える状況にあります。

このような問題を解決する糸口として、第1回目の派遣を受入れ、地域資源を再認識すること、地区民が自ら行動する役割などについて助言をいただき、特に豊かさに満足した地区は将来に危機感、そして常に改革意識を持つ大切さを他事例から再認識することができました。この助言により地区が実践すべき活性化イメージ（組織の再編・農産物直売所開設など）をつかむことができ、アドバイザーから出された宿題によって、具体的に取り組むべき活性化案を検討するに至りました。

第2回目は、海岸に接する地域資源を活用した商品の検討と地区コミュニティ施策の具体的な進め方、そして地区コミュニティ活性化の起爆剤と期待される農産物直売所開設に関し、これまで検討した方向性について適切な助言をいただき、より具体的に進めるための方策を明らかにすることができました。

第3回目は、与えられた宿題を基に地区自ら検討・事業化した取り組みを発表し、多角的な見地から状況を判断いただくとともに、女性組織の活動について不適切な取り扱いをしたことについて心を鬼にした指導までいただきました。

この3回の派遣事業の具体的な成果は、①〔第2回目派遣前の成果〕取り壊しを前提に考えていた老朽化施設の再利用を図り、農産物直売所“ええZONEマーケット”を開設し、海岸来訪者などが立寄る交流拠点を整備した。

②〔第3回派遣前の成果〕女性の視点を活かすため、“ええZONEレディース”を新たに設立し、男性本位の地域づくりから女性の優しさを取り入れることで、子供や高齢者にも理解され易いコミュニティづくりに移行した。

③〔第3回派遣後の成果〕意見集約の場に顔を出せないでいた農業後継者達（若者たち）を地区内の意識改革によって積極的にコミュニティ活動に参画できる状態にしたという3本柱を見出すことができました。

今回の派遣は、これ以外にも地域づくりに対する姿勢や考え方、行動に大きな変化が目に見えて表れ、現在も更なる発展や持続的なコミュニティ形成を目指した活動に取り組み、特に第3回目の助言が今も地区活動に好影響を与え、地区が一体となった活動に繋がっていると思います。

(企画課 加納 達也)



京都府／日吉町

今回の派遣制度では、まちづくりの拠点施設である温泉複合施設「スプリングスひよし」が近年、来場者・売上ともに減少傾向にあるため、それを改善するための解決策、活動体制を生み出すため、関係者が集い、アドバイザーの助言のもと「地域づくり研修会」を開催しました。

まずは、研修テーマである「特色ある温泉施設づくり」という点で、町にある自然環境や伝統文化などの地域資源をスプリングスひよしに反映させようということになり、現地見学や地域資源マップの作成を行い、地域資源の掘り出しをしました。これにより町内にある大学・医療機関とのタイアップや有機野菜を使っただけの特色づけなど、「健康」を取り上げたアイデアが見出せました。また、スプリングスひよしの建物自体が持つ独特の形や空間を活かすような提案や、四季を通じた特色ある食文化をレストランのメニューの中に取り入れるアドバイスも受けました。

次に「持続可能な都市交流施設の経営」を図るために議論を進めました。そこでは運営母体となる第3セクターの健全経営が最重要課題と判断し、第3セクターの経営改善にテーマを絞り込んでいきました。

そこで、第2回の研修会では、町職員、第3セクター社員がそれぞれの立場から施設運営についての意見を出し合い、纏め上げられた意見をさらに整理し、討議を行なっていました。この討議を進める中で、第3セクターの経営改善を図るためには、住民の意見や要望を経営に取り入れること、さらには住民が経営参画をすることも必要ということとなり、その基礎となる取り組みとして、町民及び施設来場者へのマーケティング調査を実施することになりました。マーケティング調査では町内の観光産業や交流活動に関するアンケートを行い、現在の取り組みにおける課題、振興策に対する意見要望を収集しました。この収集した調査結果をもとに、第3回の研修会で住民及び施設利用者ニーズの分析を行いアドバイザーからのアドバイスをもらいました。

今回の研修会では、スプリングスひよしの運営体制の具体化ないしはイメージの共有化について、町と第3セク



ターとの合意形成を図るものになりました。研修会の参加者は町職員、第3セクター社員でしたが、アドバイザーの派遣により、水平的な立場で意見交換をすることができました。

重点課題となった第3セクターの具体的経営改善施策の策定までは到達できませんでしたが、施設運営への一定のイメージを関係者が日常のなかで持っていることが認識しあえたのではないかと思います。

(企画推進課 吉田 航)

島根県／日原町

日原町は、現在、山陰の小京都：津和野町との合併協議が行われています。このため、合併までに解決できる問題は解決したい、解決できない問題は那道筋を見出しておきたいとの担当部局の思いがあります。

これまで議論をされてきながらも、解決できずにきた「第3セクターの経営」をテーマとして、3セクの負債処理等をアドバイスしていただくこととしました。

5月に、東京で制度のオリエンテーションがあり、派遣アドバイザーである大川 信行氏（東日本国際大学）、田邊 大輔氏（㈱地域総研バリーオ）にお会いし、光多長温氏（鳥取大学）が途中で参加され、打合せを行いました。

受入れにあたり、担当者として、僅か3回の派遣受入れの間に、アドバイザーに、地域を気持ち良く、効率的に、しかも正確に知っていただけるのかを、気に留めながら、計画を立てていきました。しかし、3回の受入れにあたり、食事、宿についても3セクで取っていただき、夜間は意見交換会の実施と欲張った日程を組んだため、かなりのハードスケジュールとなりました。

当初、合併問題もあり、6月～11月で受入れをしたいとの思いから日程調整を行いましたが、各地域で活躍する先生方の日程調整は困難を極め、8月～1月の期間に変更となりました。

既に打合せ会において、町及び会社概要、3ヵ年分の決算書、資料等は渡しておりましたので、第1回目の受入れでは、経営統合を視野に入れている㈱日原リゾート開発（天文台関連施設）、㈱石西社（道の駅、製糸工場）、㈱



柚の里よこみち（廃校：宿泊加工施設）、シルク染め織り館の管理に携わる人材を視察していただきました。

この際、「次回11月の受入れまでに、本町の3セク統合の方針を明確にしてほしい」とのアドバイザーからの申出があり、後日、町の考え方を送付しました。

第2回目の受入れでは、地域資源を活用し、利益を上げ、がんばっている人がいることを知ってもらいたいとの思いから、パン屋さん、野菜の青空市場、女性農産加工グループの人材を視察する機会を設けました。翌日は、3セク経営統合検討会議において、アドバイザーから最終提言（案）を発表してもらい、意見交換を行いました。

第3回目の受入れでは、一般公開の最終提言報告会を開催し、3セクの経営に問題意識のある町民にも参加していただき、提言を聞き、意見交換を行いました。

最初の打合せ会では、どうなることかと心配をしておりましたが、アドバイザーの方には、本当に熱心に討議していただき、受入れが終わってみると、感謝の念と何かしらさびしい思いが交差します。

しかしながら、今回の受入れは、課題解決のスタートであり、私たちの実践こそが重要であると思います。アドバイスが、役に立ったといわれるように、関係者も努力していきたいと話しております。

（産業課 田村 津与志）

岡山県／寄島町

寄島町は、町商工会が策定した「寄島干拓地・商業ゾーン開発のビジョン」を受けて、「人と地域資源が輝くまちづくり委員会」を設置し、4回にわたり協議を行った。

今回、国土交通省の地域振興アドバイザー（野口 秀行／日本政策投資銀行、金井萬造／㈱地域計画建築研究所、島村 美由紀／㈱ラスアソシエイツ）には、第1回、第3回、第4回の委員会に参加していただき、まちづくりのポイントについてアドバイスを受けた。

第1回目の委員会では、町商工会のビジョンについて意見交換を行ったが、事業化に向けては、土地代が最大のポイントとなるという結論になった。その中で、アドバイザーからは、「寄島干拓地全体をどうしていくかという



コンセプトが見えてこない。また、単に寄島の魚というブランドではなく、寄島干拓全体を寄島ブランドとしてランドデザインを考えて、干拓地にある既存の施設（老人健康施設、専門学校等）を活かしていくことが必要である。」というアドバイスがあった。

第3回目の委員会は、アドバイザーからの提案で、ワークショップを開催し、専門学校生や町役場の若い職員も参加して、「寄島の良いところ、足りないところは何か」、「干拓地を寄島町の将来のためにどう活かすか」というテーマで、意見を出し合った。アドバイザーからは、「今回、ワークショップに参加したのは、寄島のごく一部の人達であるが、このようなワークショップをたくさん開催して、お互いの意見を出し合い、情報交換することで、本当に必要なものが見えてくる。寄島のような小さな町こそ、それが可能である。」とのアドバイスがあった。

第4回目の委員会では、前回のワークショップで出された意見を絞り込む作業を行い、「観光・レジャーの振興」と「福祉・観光・自然の融合」という2つの提案にまとめ、委員会を終了した。

寄島町は、平成18年3月21日をもって、金光町、鴨方町と合併し、「浅口市」となる。

3人のアドバイザーからは、「合併した後も、この委員会の提案を実現するには、寄島に住む人達が立ち上がって、「自分たちの地域は、自分たちで活性化させよう」という強い意志を持ち、地域活性化のためのNPO組織を立ち上げ、まちづくりに取り組むことが大事である」と最後のアドバイスがあった。

今回、ワークショップを初めて体験したが、参加者が本当に楽しんでまちづくりを考えることができたと思う。

すでに、委員の中から、ワークショップを自分の所属する団体で開催し、NPO組織の立ち上げに向けて、前向きに考えようとする動きもあり、アドバイザー派遣により、町民の意識改革が図られた成果であると確信する。

（総務課 高倉 道雄）

山口県／長門市

平成15年度に「グリーン・ツーリズム資源点検ワークショップin俵山」を開催、俵山地域を散策し「地域資源



マップ」を作成した。このマップを地域起こしに活かそうと、青年部が中心となってグリーン・ツーリズムについて取組むため地域振興アドバイザーの派遣をお願いした。しかし、グリーン・ツーリズムをテーマにしたものの、私たちを含めほとんどがその内容について理解していないのが実情でした。このため第1回派遣では、俵山をアドバイザーに見ていただき全国の実例や実践するに当たっての方法・心構え等について宮口 侗氏（早稲田大学教授）、黍嶋 久好氏（豊根村若者センター所長）、遠藤 聡氏（株国土開発センター富山支店理事）の3人のアドバイザーからご指導いただくこととなった。

アドバイザーからは俵山の風情に大変いい感触を持っていたいただきましたが、「俵山温泉で刺身を出さなくなれば一人前」と辛口の批評もありました。また、地域に住んでいる住民は道路の整備が一番望んでいるのですが、先生は「十分立派な道路、あなた達は不便だという被害者意識を捨てなさい」と言われ参加者は賛否両論納得できない人が多かった。

第1回目の派遣を終え、俵山の持つ魅力を先生から教えていただき、2回目に向け具体的な取組みを実践するため、青年部員を3つの組織に分け取組みを展開することにした。組織は、交流の受入農家を掘り起こす「資源開発隊」、地域の人に取組みについての理解や都市へ情報を発信し参加を呼びかける「情報提供・収集隊」、体験を実践させる「人的交流実践隊」の3隊を編成した。

第2回派遣では、各隊から取組み状況が報告され、その成果は先生を驚かせました。第1回目、辛口な激励を受けた先生からお褒めの言葉をいただくとは思ってもいなかった青年部員を、気分良く次の取組みに向けて勢いづかせたのは言うまでもありません。今思えばこれも先生の誘導術だったのかと感心させられました。

第3回派遣では、活動期間は短かったのですが各隊テーマに向け自主的な活動ができ、農業名人マップの作成、情報誌の発行、インターネットの立上げ、モニター体験開催など様々な取組みを行ないました。また、来年度の取組み計画も報告、先生から「2年目のプログラムとしてはきつくないですか」と走り過ぎを心配され「足元をきちんと見て振り返りながら重ねていくことが必要」とも言われました。

今回の事業は、青年部のやらされていた活動から自ら地域を変えようとする自主活動へ大きな変化を起こす起爆剤となったような気がします。今後とも、来る人も迎える人も楽しく疲れない取組みとなるようしっかりサポートしていきたいと思っています。

（農林課 穴村 龍夫）

山口県／錦町

錦町役場の庁舎は、昭和30～40年代に最も栄えた商店街のほぼ中心に位置している。その庁舎は、施設の老朽化などにより、建て替えることとなっている。住民からは、「現在地にそのまま建て替えてほしい」「庁舎の横を

流れる錦川の対岸でバイパスの通る道路側に広く建て替えてほしい」「現状の役場を改修して使ってほしい」などさまざまな意見が寄せられていた。

町では、庁舎建設委員会などを発足すると共に、議員の皆さんの意見も踏まえながら、川の対岸に建設する方針を打ち出したが、現役場の位置を有効に活用し、商店街の活力を取り戻す取組みも必要との思いから、アドバイザー派遣の要望を行うこととなった。

今回お越しいただいたアドバイザーは、寺川 重俊氏（寺川ムラまち研究所代表）、市村 良三氏（ア・ラ・小布施代表 現在小布施町長）、高橋 寛治氏（前飯田市産業経済部長 現在高野町助役）の3名の方である。皆さんからは、当初「商店街活性化のためには差別化できる施設はできるだけ残していくこと」とのアドバイスがあった。しかし、役場が移転するのであれば、このまちをどのようにしていきたいのか、本気で考えようということになった。

1回目には、受入組織である錦町商工会青年部の意見を集約。2回目は、「このまちをどういうまちにしたいか」「中心部はどういう働きをすればよいか」についてワークショップ形式で意見の取りまとめをした。3回目は、商工会青年部のみで、このまちの魅力などについて、シーズ探しを行った。4回目に、これまでの意見を総合的に考慮し、「みんなが主体となってこの町を活性化させることが大事だ」ということで意見集約を行った。そして、合併を目前に控えた錦町が今やるべきことは、自立のまちをつくること。町民全員参加の組織をつくり、自らまちを支えていくことのできる仕組みを立ち上げること。その中心となるのが、現錦町役場の事務所であり、中心地に人が集まることで、商店街の活性化にも繋がるという結論に辿りついた。

非常に大きな課題を頂いた今回のアドバイザー派遣制度だが、このことをきっかけに、商工会青年部のメンバーや行政が手を取り合って、今大きく動き出そうとしている。その後も会議を重ね、真剣に準備を進めているところである。町民が全員参加し、自らの町を支えていく仕組みづくりがうまく進めば、全国でも珍しい事例となることだと期待を膨らませている。

（地域振興課 三浦 成寿）



熊本県／あさぎり町

あさぎり町は平成15年4月1日に旧5か町村が合併して誕生した町ですが、旧5か町村の地域に眠っている地域資源を発掘し、お互いが再認識できる環境をつくり出すために次の3つのテーマに分けてアドバイザー事業を実施しました。

テーマ1「球磨焼酎の活用及び幸福づくりについて」

いまるネット(株) 河部 真弓氏

テーマ2「特徴ある道や景観について」

中国・地域づくり交流会副会長 安藤 周治氏

テーマ3「駅前町の町並みについて」

都市環境研究所九州事務所所長 玉田 孝二氏

第2回目の派遣は、3つのテーマごとに現地を見て回るワークショップを実施しました。テーマ1では、町内にある球磨焼酎蔵元やおかどめ幸福駅を見て回り、球磨焼酎と幸福駅を活用した地域興しについて話し合いました。テーマ2では、町内の特徴ある道を見て回り、道の景観を活かした取り組みや昔から伝わる歴史的事柄を調べてみることにについて話し合いました。テーマ3では、駅前周辺の現状と問題点を把握するために現地を見て回り望ましい駅前の姿について話し合いを持ちました。第2回目の派遣後、テーマ2では、具体的な取り組みとして中世城跡に通じる歴史ある麓馬場通りに紙袋のあかりを灯す「冬のあかり」イベントが年末から年始にかけて地元住民主導でスタートしたことや、古草城地区では、旧字の名前の由来や坂の名前など歴史的事柄を地元住民が調査を始め一冊の資料にまとめられました。また、テーマ3の駅前の町並みについては、地元商店主による「駅前振興会」というグループが立ち上がり、毎月一回の会合が行われるようになりました。

第3回目の派遣においてテーマ1では、女性限定による町内の5軒の球磨焼酎蔵元を廻る体験ツアーを実施し、女



編集・発行

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-1-1 飯野ビル717
財団法人 日本地域開発センター
TEL. 03 (3501) 6856 FAX. 03 (3501) 6855

性の視点から見た球磨焼酎のイメージアップと地域資源の再発見・再認識を図りました。

それぞれ3つのテーマに分けて取り組んだことにより、各テーマで活動する組織が立ち上がったことや地域住民が地元にある地域資源の魅力を知ることができたことは、今回のアドバイザー事業の成果であると思いました。中でも麓馬場通りで行われた「冬のあかり」イベントからヒントに「夏灯籠」イベントも今後実施しようという意見が出され、地域住民を巻き込んだ取り組みになっていくことを期待しております。

3回のアドバイザー事業を実施し、地域の中で地域づくりを取り組もうとする動きが出てきたことは、いいきっかけになったと思います。今回アドバイスをいただいた中でやはり、地域づくりとして取り組むリーダーが必要だと感じました。今後、地域の中で活動家を育成し、お互いが協力し合う関係こそが合併後の魅力あるまちづくりにつながっていくことだと感じました。

(企画財政課 沖松 勝彦)

珠洲市／日置地区 体験交流事業に参加して

珠洲市のアドバイザー派遣後、日置地区で学校を活用した体験交流事業の実験が3月26日午後1時～8時にかけて開催された。当初、開催を危ぶまれるほどの態勢であったが、参加してみると大変充実した体験プログラムとなっていた。

当日は天気にも恵まれ参加者は、家族連れ、地元出身者、学生等約40名で3班に分けて行われた。体験メニューは、①炭焼き体験（大野製炭）、②しいたけ作業体験（堂ヶ平農園）、③乗馬体験（STROKE乗馬）、④わら細工体験（狼煙緑剛長寿会）に加えて、日置小学校において郷土料理を食べながらの懇談会だった。多くの住民が参加して創った、珠洲の豊かさを感じさせる内容だった。これからの本格的な取り組みが楽しみである。

(事務局)



プログラム終了後のスタッフ記念撮影

〒100-8918 東京都千代田区霞が関2-1-3
国土交通省都市・地域整備局地方整備課
TEL. 03 (5253) 8404 FAX. 03 (5253) 1588